

## 【書評1】

佐藤環著『茨城県女学校のあゆみー茨城県における女子中等学校の歴史的変遷ー』

小川哲哉（教育学部）

女子差別撤廃条約の批准（1985年）や男女共同参画社会基本法の施行（1999年）などを  
受け、旧制の女学校を母体とした新制公立女子高等学校の多くは男女共学校に衣替えし、そ  
れに伴って校名・校章・校訓を変更していった。また、戦後の学制改革から70年以上が過  
ぎ、旧制女学校の卒業者でご存命の方々が年々減少しており、旧制女学校は記録には残るも  
のの忘却される存在となっている。

茨城新聞社から2015年に刊行された本書は、明治期から第二次世界大戦後の学制改  
革に至るまでの茨城県近代女子中等学校の歴史的展開を叙述したもので、次のような構成  
となっている。

はじめに

### 第1章 近代女学校制度の概略

1. 近代日本の女子中等学校
2. 茨城県における女学校の情況

### 第2章 茨城県立校として設置された高等女学校

1. 茨城県立水戸高等女学校
2. 茨城県立土浦高等女学校
3. 茨城県立水戸第二高等女学校

### 第3章 市町立高等女学校

1. 水戸市立高等女学校
2. 那珂湊高等女学校

### 第4章 実科高等女学校から高等女学校への昇格

1. 水海道高等女学校
2. 太田高等女学校
3. 石岡高等女学校
4. 鉾田高等女学校
5. 高萩高等女学校
6. 岩井高等女学校

### 第5章 実業学校から高等女学校への昇格

1. 大子高等女学校
2. 潮来高等女学校
3. 龍ヶ崎高等女学校

4. 下館高等女学校
5. 結城高等女学校
6. 取手高等女学校
7. 古河高等女学校

#### 第6章 私立女学校の展開

1. 私立女学校から県立高等女学校へ
2. 私立女学校の充実過程

#### 第7章 職業教育を行う女学校

1. 太田実践女学校
2. 石塚実践女学校・石塚高等実業女学校
3. 大宮実践女学校
4. 江戸崎実践女学校

#### 補論 短期大学の展開

1. 短期大学制度
2. 茨城県における短期大学の情況

あとがき

戦前期の女子中等学校と言えば良妻賢母教育を標榜した高等女学校が有名だが、その他にも裁縫技術伝授の女学校や各地域の農業や商業などのニーズに対応する実際的な職業教育を行う女学校が設置されており、多様な側面を有していた。本書の目次構成からもわかるように、茨城県内の高等女学校令により設立された高等女学校・実科高等女学校、私立学校令に基づく女学校、実業学校令によって職業教育を行う女学校を総合的に研究し、その全体像を明らかにした書は管見の限り今までなかったように思う。

明治10年代より男子の中等学校が整備されるにつれ、明治中期以降、女子の中等学校設置の必要性が叫ばれるようになり、全国各地で女学校の設置が推進されていく。本書では、茨城県の女学校について法的根拠と設立目的に分類してその特色を明らかにしている。巻頭の折り込みには茨城県公立高等女学校年表が附されている。その年表は、県北、県央、鹿行、県南、県西の5地域に分け、校名や設置者の変遷が一覧できるようになっており、全体を把握するに役立っている。

さらに著者は、政府主導の女学校と民衆のニーズによって設置に至った女学校に分類して叙述を展開している。

第2章で取りあげられた茨城県立水戸高等女学校（現茨城県立水戸第二高等学校）、茨城県立土浦高等女学校（現茨城県立土浦第二高等学校）は、高等女学校令により設立されたモデル校になっており、その後公立高等女学校が増設される際にはこの形式が模範になっている。また、茨城県立水戸第二高等女学校（現茨城県立水戸第二高等学校）は昭和初年の小学校教員不足解消のため女子師範学校内に併設された。いずれも、政府の良妻賢母を育てる

という文教政策に沿って設置された「上からの」女学校である。

第3章から第5章で取りあげられた学校群は、女子の高等普通教育志向が高まっていったことで増設された女学校の数々である。高等女学校が大衆化していくことで、県立高等女学校を最上位とし、以下、実科高等女学校、実業補習学校女子部、女子職業学校といったヒエラルキーが形成されていく。学校経営基盤の安定・強化を図るため県内各地の女学校では、女学校の県立校昇格運動が展開された。昇格基準は、施設設備や敷地の確保、教員審査に耐えうる教員の確保、そして県立校に昇格しても地域が財政支援を継続することであり、地域一丸となってその難題を克服したのである。これらのケースは、官尊民卑の当時において、地元の教育ニーズによって設置した女学校を「上からの」学校制度に適合・同化させることにより、学校の威信を高めようとしたのだろう。

第6章では私立女学校を取りあげ、私立校から県立校となる事例（下妻高等女学校と日立高等女学校）と私立校として存続することを選んだ女学校について述べられている。この違いは、創立者が女子教育に強い信念を持っていたかどうか、財政基盤の強弱、地域の女子教育ニーズに対応できる学校体制を構築できたかがポイントとなる。例えば、明治末年に茨城県初の私立女子中等学校として発足した大成裁縫女学校は、大正期に水戸市大成女学校に改称し本科・専科・研究科・家政科を擁することとなり、昭和に入ってから私立学校令による各種学校の水戸市大成女学校に加えて高等女学校令による大成高等女学校が設置された。これによって、裁縫技術習得ニーズに加え普通学ニーズにも対応できる学校体制を確立したのである。

本書は「女学校の歴史を整理し叙述することを目的とし、茨城県の旧制女学校の“カタチ”を整理・俯瞰し今後の後期中等教育の参考となる基礎研究として位置づける」ことを目的としている。従来看過されることが多かった実業学校令に依拠する女学校にまで目を向けることで、多様な女学校の“カタチ”を十分描き出していると言える。

ただ最後に無い物ねだりであることを承知の上で、評者としてはさらに筆者に深めてもらいたい事項を以下に掲げておきたい。

一点目は、紙幅の関係で無理であったと思うが、できれば学制改革により旧制高等女学校から新制高等学校に転換する際に設置された併設中学校の役割や実態についての解説が欲しかった。近年戦後の混乱期における教育改革への再評価なされており、その今日的意義を確認する必要があると思われるからである。

二点目は、本書では国立公文書館をはじめとする諸史料を丹念に収集・分析して各学校の成り立ちを明らかにすることについては成功しているが、そこに通う生徒の実態が十分には描き切れていないように思う。土浦高等女学校の生徒が書いた日記の分析はあるものの、生活者としての教員や生徒の事例研究を本文に盛り込んでいただけると、より重厚な研究になるのではないかと思われる。

さらに三点目は、昨今、「開かれた学校」、「開かれた教育課程」といった文言が教育改革

のスローガンとして掲げられている。本書では地域にある女学校を県立高等女学校に昇格させるための地域運動が沸き起こったこと、またそれが奏功して県立高等女学校に昇格した事例を挙げているが、草の根運動とも言える地域の女学校昇格熱についての説明が望まれる。

最後に、さらに欲を言えば、女学校のみならず男子の旧制中学校・実業学校の研究を行って、茨城県中等教育の全体像を示してくれることを期待したい。

(2020年1月9日掲載)